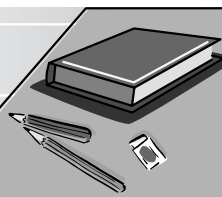


学生時代と図書館 70

— 三度の変身 —

菅野 瑞治也



「ある朝、グレゴール・ザムザがなにか気がかりな夢から目をさますと、自分がベッドの中で一匹の巨大な毒虫に変わっていることに気がついた…」言うまでもないが、これはあまりにも有名なカフカの『変身』の冒頭部分である。そして、大学図書館で山下肇氏が訳されたこの本をふと手にした瞬間から私は大変身を遂げていくことになる。それはまさに私の人生における第一の転換点となった。

子供の頃から勉強よりスポーツの方が得意であった私は、中学及び高校時代はサッカーと柔道に打ち込み、また大学ではアメリカンフットボール部に所属し、我が青春をこのスポーツに捧げた。というわけで、あまり大きな声で言えないが、21才の時に『変身』と出会うまで私は図書館とはほとんど縁がなかったと言ってよい。カフカのこの作品は、それまで読書をするという習慣がなかった私に強烈なインパクトを与えた。

その後、大学院に進学し、ドイツに留学した私は、結局は私の人生の第二の転換点となった一人の教授と一冊の本に出会うことになる。ハイデルベルク大学のドイツ文学ゼミに参加した私を親切に指導してくれた教授と、その教授に紹介していただいた一冊の本がその後の私の歩む道を決定づけたのである。そして、この本はポロポロになってしまったが今でも私の研究室の本棚の片隅にちょこんと立っている。本の著者とタイトルは次の通りである。Sabina Kienlechner: *Negativität der Erkenntnis im Werk Franz Kafka* (ザビーナ・キーンレヒナー:『フランツ・カフカの作品における認識の否定性』)。ハイデルベルクの大学図書館に毎日のように通って、辞書を傍らに置いて夜遅くまでこの本をむさぼるように読んだことを今でも鮮明に覚えている。

ところで話は多少逸脱するが、ドイツの大学図書館は夜中の12時まで開いているのが一般的であ

るが、それに対して日本の大学図書館のほとんどが早めに閉館するのはなぜだろうか？——これがそのときからずっと抱いていた素朴な疑問である。夥しい数の本に囲まれた不思議な空間と静かに、しかし確実に前向きに流れる夜の時間、その静謐な時間と空間を享受できることこそ大学の原点ではないか。

ドイツ留学を終えて日本に帰り、大学院博士課程に進学することになるが、そこでもまた信じられないような、夢のような出会いが私を待っていた。冒頭で述べた、私の人生を変えた『変身』の訳者である山下肇先生がちょうどその年に私が進学した大学院の教授に招聘されたのである。博士課程在籍中の大学院生の中で、カフカを専門的に研究しようとしていたのは当時私だけであったということもあり、山下先生は親切に、そして熱心に私を指導してくださった。これが文字通り私の人生の第三の転換点となった。先生は、カフカのいくつかの作品を翻訳したり、或いは研究・紹介するために、来る日も来る日も弁当持参で国立国会図書館に通われたお若い頃のことを幾度となく話された。「自宅にいと怠けるし、図書館に行くとき周りの人間に無意識のうちに刺激されていい仕事ができるんだよ…」とおっしゃった先生の言葉と柔らかな表情が今でも鮮明に蘇る。また、極めて印象的であったのは、山下先生がどの授業においても最初の30分は必ず本の紹介と学生との雑談に費やされたことである。先生のある著書のあとがきには、「講義を通して知り合った学生諸君のレポートや熱心な発言等々が、私の目を開いてくれたことも決して少なくない。」と書かれてある。図書館と本と学生をこよなく愛された、我が恩師山下肇先生は一昨年他界された。この場をかりてご冥福をお祈りしたい。

すがの みちなり 教授(ドイツ文化史・ドイツ文学)